

日本女性SF作家における 代替ユートピア 新 井素子『チグリスとユーフラテス』論

著者	サウット キアラ
著者別名	SAUTTO Chiara
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	56
ページ	85-104
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011726

日本女性SF作家における〈代替ユートピア〉 —新井素子『チグリスとユーフラテス』論—

文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程3年

サウット キアラ

要旨

新井素子『チグリスとユーフラテス』は家父長制的な社会において、女性の問題、特に「出産」、「母性」を中心に表象している作品である。ディストピア的な世界や社会を描く新井は、同時に〈ユートピア〉への希望を表現しようとしている。

本稿では、本作の根底にある社会批判を明確にしたうえで、新井の〈ユートピア〉とは何かを検討した。

まず、本作を「クリティカル・ディストピア的なアポカリプス文学」として評価した。次、日本におけるフェミニズム史は、本作における歴史に反映されていることを明確にした。更に、新井の独特なフェミニズム論は、自然主義フェミニズムとエコフェミニズムに属する側面を持っていると考察した。また、エコフェミニズムと神道的な考え方は、本作にどのように表現されているかを分析した。

最後に、新井の描く〈ユートピア〉は物語の世界では失敗してしまうが、「再生の希望」があるため、未来の〈代替ユートピア〉の可能性が残っていると考えられる。新井は、主人公たちの物語を通じ、戦後時代からあまり変化のないジェンダー役割に基づいた社会構造を女性の視点から描写し、改善への欲求を表象しようとしているのである。

キーワード：新井素子、アポカリプス文学、ユートピア、ディストピア、出産、エコフェミニズム、ジェンダー

目次

1. はじめに
2. クリティカル・ディストピア的な「アポカリプス文学」として本作を読む
3. 生殖、中絶、フェミニズム。惑星ナインと日本史をめぐって

4. 新井のフェミニズム論とは―「母性」とエコフェミニズムの影響
5. 本作における「神道的」な考え方の影響
6. おわりに

1. はじめに

新井素子は日本のSF、ミステリー作家である。彼女は「少女文化」の代表作家として評価され、¹『あたしの中の…』でデビューした。初期作品の特徴は、1980年代の若い女性の話し方に沿った「言文一致」の文体スタイルである。1980年代にわたり、新井は作家活動을 続け、『グリーン・レクイエム』、『ブラック・キャット』など、ベストセラーの作品を次々に発表した。1980年代の後半から1990年代の前半にかけて、新井はミステリー小説を中心に描き続けたが、『チグリスとユーフラテス』の掲載をきっかけにSFに戻ったと本人は言及している²。本作に収録されている「マリア・D」「ダイアナ・B・ナイン」「関口朋美」「レイディ・アカリ」という四編は、まず1996年から1997年まで『小説すばる』に掲載されており、1999年に第20回日本SF大賞受賞作品になった。

『チグリスとユーフラテス』の物語は、地球人のグループは惑星ナインへ移住し、「ユートピア」的な新世界を作る、という欲求から始まる。しかしながら、最初の語り手の編から、人口減少のため、惑星ナインは一人の女性しか残っていない状態にある、ということがわかる。その女性はルナといい、惑星ナインの「最後の子供」である。彼女は老女の身体をしているが、見た目も、話し方も、完全に「少女趣味」のステレオタイプを極端化し、他の主人公にとって、グロテスクな人物とみなされる。

ルナは自分の母親や、惑星ナインに対する複雑な気持ちを抱き、自分の存在理由がわからずに生きている。孤独に耐えられず、更にその存在理由を見つけるため、コールド・スリープについている上記の四人の女性を順番に起こし、「自分探し」を始める。結局、惑星ナインの女神となったレイディ・アカリと出会ってから、惑星ナインのすべての生き物を「ケア」するようになる。ついに、「最後の子供」から「最初の母」になり、亡くなるまで残りの人生を平和に過ごす。

本作にはルナを主人公とする〈ルナ編〉がないが、間接的に全体をルナの物語として読むことはできる。新井はルナを通じ、日本における家父長制的なコンテキストで女性とは何かを考察し、女性の問題として考えられる「出産」と「母性」の在り方を幅広く検討する。特に、本作は社会の期待がどのように女性の人生や選択肢に影響しているかを表象しようとしているのである。

しかし、本作における新井のユートピア・ディストピア実験は、結局「アポカリプス」＝「破壊」という結末に至る、という視点からみると、現実世界の日本社会とは同じく未解決な状態だといえる。未来のユートピアへの希望は確かに表現されているが、そのユートピア

は人間が存在せずに成立できるかどうか、そしてそのユートピアにおける女性の社会的位置はどうか、という疑問に答えずに終わる。

本稿では、新井が描くユートピアの根底にある彼女の独特なフェミニズム論、そして「神道」的な考え方を明確にする。その分析を行った上で、新井の描くユートピアとは何か、そして1990年代の日本文学世界において彼女の位置づけを考え直す。

2. クリティカル・ディストピア的な「アポカリプス文学」作品として本作を読む

まず、本作を「アポカリプス文学」として考える必要がある。「アポカリプス文学」というのは、SFのサブジャンルであり、様々なパターンで世界の終わりを想像する物語を含んでいる。例えば、自然災害、環境破壊による気候変化、資源減少、病気、原爆などのため、文明が終りかけている、という状況を描く作品である。³

「アポカリプス文学」の他には、「ポスト・アポカリプス文学」も存在する。「ポスト」という言葉が示唆するように、世界が終わってしまった〈後〉の場面を描いている物語を指している。こういった現代フィクションは第二次世界大戦後における核戦争の恐れのため、人気を博してきたが、実際には新約聖書の「ヨハネの黙示録」に由来する言葉である。語源はギリシャ語で「アポカリプシス」といい、「開示する」「暴露する」ことを意味した単語であった。現在の「黙示」や「アポカリプス」という言葉にも、「隠されていた真理を神が開示する」という意味は残っている。しかし、「ヨハネの黙示録」が終末論的な内容であったため、「アポカリプス」には「最後の審判」「人類の滅亡」というような「終末」というニュアンスが残っている。したがって、「アポカリプス」＝「人類文明破壊」と認識されることが多い。⁴

本作の場合は、テクノロジーの開発による災害のため、人類が滅亡するシナリオが描かれている。しかし、その後の世界が描かれていないため、本作を「アポカリプス文学」と見なすことができるであろう。世界が終るその瞬間よりも、その結果に至るまでの出来事が中心に描かれているのである。

更に、『チグリスとユーフラテス』は、当然のことであるが、スペキュレイティブ・フィクションとして現実世界を批判的に描写するものである。しかし、読者側にとってはかなりディストピア的な要素が用いられていると感じられるものの、ユートピア的な部分もあると思える。実際には、先行研究において、本作をフェミニスト・ユートピアの一例として小谷真理は論じている⁵。しかし、本分析ではトマス・モイランが定義した「クリティカル・ディストピア」⁶の一例として考察したい。クリティカル・ディストピアの定義は以下の通りである。

（クリティカル・ディストピアは）作者の意図により、現代の読者にとって生きてい

る現実よりも悪化している状態にあると感じられる時代や場所を背景とする、詳しく描写されている存在しない社会のことである。そういった社会は普段、最低一つのユートピア的な飛地を含む、あるいはディストピアが乗り越えられ、ユートピアになれるという〈希望〉を孕むのである。⁷

確かに、惑星ナインの社会は詳しく描かれ、実際に存在しない空間（地球ではない空間）における現実世界より、悪化した状態にある。そして、その社会の構成にはユートピア的な部分があり、最終的にユートピアへの欲求を持つものが描かれているのである。したがって、本作を上記の定義に沿ったものとして考えることができる。要するに、本作を「クリティカル・ディストピア的なアポカリプス文学」として評価し、論じていきたい。

3. 生殖、中絶、フェミニズム。惑星ナインと日本史をめぐって

『チグリリスとユーフラテス』は惑星ナインの年代記として構成されている。なお、本作をクリティカル・ディストピアとして考えた上で、その年代記を分析すると、日本の歴史がどのように反映されているかがわかる。ここでは、生殖権利に関する日本におけるフェミニズム史を取り上げ、惑星ナインの年代記と対比する。

惑星ナインで施行されている生殖管理のポリシーをみると、日本の歩みと似たパターンに気づかされる。戦争時の「産めよ増やせよ」的な計画もあれば、子どもの人数を制限する家族計画もある。そして、本作が発表された1990年代における「少子高齢化」に対する政府や社会の不安を読み解くことができる。

加野彩子が『Japanese Feminist Debates』⁸において、明治時代から現代までのフェミニズム史を考察している。彼女の分析を参照しながら、惑星ナインの年代記との類似点を述べていきたい。

年代	日本史	年代	惑星ナイン史
1910～ 1920年代	妊娠や避妊に対する、相対する意見がある	元年	惑星ナインへの到着 人工子宮による出産と自然出産により、区別される
1930～ 1940年代	優生の議論に対して関心が高まる 「産めよ増やせよ」 避妊が犯罪になる	100年前後	人口増加 人工子宮の使用が一般的である 新しい人工子宮が開発される 「安定の時代」
1950～ 1960年代	ベビーブームに対応する「家族計画」 避妊が勧められる 優生手術が法的	150年前後	「人口爆発の時代」 子供は「夫婦の子」である
1970年代	ウーマンリブ 優生保護法に反対	250年	人工子宮の利用者が劇的に減る
1980年代	ニューフェミニズムウエーブ 少子高齢化への関心が高まる 政府は中絶を制限しようとする	275年	有資格者法が施行される 妊娠は義務となる
1990年代	中絶に関する法律が変わる 「優生保護法」は「母性保護法」になる	340年～ 352年	子供は「惑星の子」 有資格者でも不妊のケースが増える

まず日本では、1910～1920年代において、「中絶」に関する論争が始まっていた。中絶の理由として、四つの理由が挙げられている：①財政難、②優生、③自然、④女性の人生の複雑性（①は中絶の99%の割合を未だに占めている）。議論の結果としては、特に重要なのは、出産するはずの母親・家庭の経済的な状況である。議論の参加者により、避妊が望ましいか、中絶が許されるか許されないか、様々な意見があった。そして、中絶せずに出産し、生まれた子供が生きていくかどうか、「自然」に任せるという意見もあった。⁹

財政難に対する母親の心配、そして政府の視点は、本作にも表現されている。例えば、第二章の「ダイアナ・B・ナイン」編において、惑星管理局のダイアナ・Bと七人目の子供を出産したが貧困のため子供が死んでしまった母親との対面が描かれている。

「市民の為に努力はしていますよ、普通の市民の為にね。あなたは、普通の市民でも、不幸にしてそういうめぐり合わせになってしまった本当の貧民でもない、勝手な貧民です。何だって、勝手な貧民の為にまで、我々が努力しなければならないんです」

「な、何が勝手な貧民よ！だって、だって、できちゃった子供はどうしようもないじゃない！お腹の中に子供がいるって判って、それが六人目や七人目だったら、じゃ、どうしろっていうのよっ！」

「墮ろしたらよかったんだと思いますよ」

「…それが人間の言うことなのっ！あ…悪魔っ！鬼！あんた達惑星管理局員って、血の通った人間じゃないわっ！」¹⁰

惑星ナインの歴史に戻ると、「このままではナイン、老人の星になってしまうのではないか……？」¹¹という市民の抱く不安が、「有資格者法」に至る。

「有資格者法」というのは、生殖能力の有無に基づく社会構造であり、当時の日本には存在しない、新井が思いついた実験的な制度だといえる。現代日本社会が恐れる「カタストロフィ」がすでに起きてしまったシナリオを描く新井は、現実世界における少子高齢化の一つの原因としては、子供を育てるための経済的な条件、そしてキャリアと母性のバランスが挙げられる。それに関して、作中では、特に「マリア・D」編において、女性の役割は子供を産むことである、と主張されているが、同時にその子供の将来を考え、現状を考える必要があるかもしれない、という疑問は表現されている。

「子供を産むことは、社会に対する義務だし、子供を産めることは素晴らしい。けれど…だからといって、産めるからといって、無条件に子供を産んで…それで、いいのか？」

こんな疑問が、社会全体に、中でもとりわけ有資格者内部に、無言のうちに、蔓延し

ていたのだ。¹²

新井がフィクションの中で、子供を育てるための理想の経済的な状況を保証するものとして「有資格者法」を想像したのである。有資格者は生まれてから年金をもらい、一生働く必要がなく、ベストの教育や医療などを無料で受けることができる。そして、父親も母親も子育てにしか集中しない。それは、語り手にとって、地球の状況に比べると、苦勞せずに子育てに集中させる理想的なシステムだと思われるが、結局この特権階級は貧富の差を作っているだけである。その点について語り手はあまり踏まえていないが、そのような問題があったとは語っている。

今までみてきた歴史を振り返ると、本作が扱っている主なテーマは「生殖」であり、特に「中絶」と「優生」の倫理的な問題である。新井の世界では、まず地球の話において、「馬場クリニック」の困難について語られている。特に、「中絶」を他のクリニックより行う明は、次のように描かれている。

明は、ごく普通の産婦人科医だった。

勿論、産婦人科医の主な使命は、新たな「命」をこの世に産み出すことにある。

だが、同時に。

産婦人科医は、母体に危険があったり、妊娠を続けることが母体の健康上困難であったり、出産をすることが将来的に見て母体に好ましくない影響を与える場合、「堕胎」をすることも許されていた。

そこで明は、その「将来的に見て母体に好ましくない影響を与える場合」って事態を、いささか拡大解釈して、平均をはるかに上まわる数の堕胎手術を手掛けていたのだ。「母」になる覚悟がまだまったくない少女が、「母」になるつもりなんてまったくなかった少女が、なりゆきで「母」になってしまうこと、それは勿論、母になってしまった少女にとっても悲惨だが、生まれてしまう子供にとっては、悲惨以上のものである。そういう信念を持つ明は、悲惨な子供達が増えることを防ぐ為にも、「精神的」に「母」になれない少女の堕胎を、かなり積極的に行ったのだ。¹³

この箇所からみると、明は自分で判断し、「中絶」を行ってもいい場合を決める。「将来的に見て母体に好ましくない影響を与える場合」がどのような状態を表すのであろうか、そして、誰が決められるのであろうか、という上記でみてきた論争を考えさせるところがある。

また小説の世界に傾くと、明の妻さゆりは人工子宮の専門家であり、逆に中絶より、出産のほうを担当していると語られている。しかし、人工子宮は体に負担をかけずに胎児の状態をよりよく確認させるものとして描かれているが、まさにその機能の使い方によって、「中絶」

が簡単にできるものとなる。レイディ・アカリ編においては、人工子宮の使用の場合、「中絶」や「優生」に関わる問題、つまり胎児が不健康であれば、障害者として出産するかどうか、という親と医者責任について描かれている。

もし、治療のしようのない異常だったら。生きるのに差し支えはないが、常時、何らかのささえが必要だったり、障害が現れてしまうものだったら。

とても、困ったことに、なるのである。

子供を産む。

それは、大人になった人間が味わう、最高の究極の選択だ。

〴〵子供を作るか作らないか、

もし、人生がゲームなら、これは、非常にエキサイティングなシチュエーションとなっただろう。

だが、人生が、ゲームではない。

故に、この問題は、エキサイティングなものにはなり得ない。¹⁴

更に、次の箇所では、「テクノロジー」を象徴する「人工子宮」は、「自然」を示唆する「神」と重なり合わせられる。それによって、人工子宮も、女性の子宮と同じように捉えるべきであり、出産がうまくいくかどうかは「自然」＝「神」によるものとされている。

〴〵何故、この子を堕胎したのだ？、

〴〵何故、この子を産ませてしまったのだ？、

〴〵人工子宮は、神の判断ではないのか？どんな子供が生まれてよく、どんな子供は生まれさせない、そんな判断は、神にしかできない。¹⁵

ところが、最初の頃は人工子宮が人気を博した理由は、「不妊」を解決するというメリットである。「不妊」に対して新井の立場を考えると、彼女自身の不妊経験をもとにしたと推測できるが、このテーマはずっと小説中に響くものである。地球の場合は、人工子宮のおかげで、不妊治療を受けずに妊娠が可能になる。

当時、好き勝手な妊娠による、〴〵覚悟のない母、の増大と共に、社会問題の一つだったのは、〴〵妊娠したくともできない人々、だった。(中略)

不妊の治療法は、その原因により、いくつもある。一般的には、体質改善、ホルモン療法などを行うのだが、それでも妊娠が無理だった場合。最後の切り札として登場するのが、人工授精と人工子宮だったのだ。

そして、この二つの技術が共存している場合、殆どの人が、最終的に、人工子宮で子供を育てることを選択した。¹⁶

しかし、惑星ナインの場合、人工子宮を使いすぎた結果、人工子宮で生まれた人は生殖能力を段々失ってしまい、返って「不妊」という問題が生じ、惑星ナインにおける人類絶滅に至る。それはどのような意味を持つのであろうか。一つの答えとしては、次に考察していく新井の独特なフェミニズム論である。

4. 新井のフェミニズム論とは — 「母性」とエコフェミニズムの影響

小谷が指摘するように、本作には新井の独特なフェミニズム論が含まれている。¹⁷ 更に分析すると、新井のフェミニズム論には特に「エコフェミニズム」と「自然主義フェミニズム」に類似する部分があるといえる。

まず、エコフェミニズムについて論じていく。当然のことだが、新井が女性人物を中心に描いていることはかなり重要である。新井は女性を主人公にした理由は、自分の好みによる決心の他に、物語においてはルナが男性と関わったことがあまりにも少ない、ということだと述べている。¹⁸ それは確かだが、この小説のフォーカスは女性であるということを証明するものともなる。

エコフェミニズムは、女性と自然の歴史的、生物学的、経験的な結びつきを強調し、論理を組み立てる。シェリリン・マック・グレガーは、こういったエコフェミニズムの観点を次のように主張している。

生命を支えるケア・育成・仕事をするのは女性（母親として）であるため、女性は〔中略〕各自の環境に気に掛ける。次第に、それは環境を保つ・補修することにいたる。こういった関係はほめたたえられるべきである、と彼女らは主張している。それはなぜなら、人間や環境のことを気にすることは、相関性のある生命のプロセスに関する特別な感覚を形作るからである。それらの感覚は、環境破壊に至ったこういったプロセスに対する個人的で搾取的な（つまり、男性的な）アプローチとは異なるものである。¹⁹

『チグリスとユーフラテス』の物語においても、この考え方が存在する。特に、エンディングのところで、その関係が明確になる。レイディ・アカリ編では、彼女がルナに惑星ナインの「ケア」を引継ぐことには、女性と自然との結びつきが示唆されていると考えられる。レイディ・アカリは最初にルナから「ナインの母」と呼ばれているが、最終的にはルナがナインの「最初の母」になると描かれている。しかし、なぜルナには「母」になる必要があるのであろうか。この「母」という役目は非常に意味深い。

ルナがナインの「最初の母」になることによって、自然との崩れていたバランスが元に戻るのである。「母」という言葉が用いられている理由は、「ケア」という概念と関連することである。エコフェミニズムは、女性の本質性を女性性との区別が曖昧であるため、その本質性が「ケアする母」と一致してしまうところがある。更にいうと、エコフェミニズムが重視する「他者」と「相互的な自己」の関係性は「子供に対する母のケア」と比べられる。²⁰

つまり、「出産する」、「母になる」という概念は、ルナとレイディ・アカリの関係からみると、「ケアする」からこそ「母になる」ことができるということの必然性が明らかである。そのように、人間に限らず、惑星ナインの全ての生き物をケアすることにより、ルナが「最初の母」となる。そういった「母」は、生殖能力に基づいたものではなく、新しい「ユニバーサル母性」に基づくものとして考えられる。惑星ナインの「ユニバーサル母」になったルナは、惑星ナインの生命を死ぬまで守りつづけるのである。

最後に、新井のフェミニズム論に影響を与える「自然主義フェミニズム」に属する点を挙げたい。「自然主義フェミニズム」は秩序だてた論理として存在しない²¹が、ここで注目したいのは、この運動が求める「女性のための科学」という概念である。

生殖技術は「自然」に逆らい、結局ナイン移住計画の失敗を引き起こす。そして、家父長制的な観点から利用されているといえる。それはなぜかというと、人工子宮が「外付け」であること、そして女性の生活に与える影響が、家父長制社会の欲求に沿ったものとして描かれているからである。

1970年代のウーマンリブが求めていた女性の「行為遂行性」(agency)は、男性のように出産から解放されることを含めていた。ウーマンリブは、家父長制により制限される女性の行為遂行性の問題を、出産から始めていると主張している。そのため、フェミニズム文学におけるスペキュレイティブ・フィクションは、テクノロジーを利用し、女性の身体に負担ではない出産を想像していることが非常に多い。したがって、その時代のラジカル・フェミニズムに合わせ、生殖テクノロジーを肯定的に表現する作品が数多くある。

しかし、新井の場合は、テクノロジーが女性のためになるものとして描かれていない。誰かのためになるものとして考えるのであれば、それは惑星ナインの政府である。生殖能力が個人のものでなくなったナインでは、人工子宮による出産は政府に管理され、人口を理想的に増加させるために用いられている。更に、作品の中の地球の場合、人工子宮は「不妊」の解決方法として導入され、性役割に応じることのできないカップルに向け、何かの「誤り」を直すという論理が根底にあるといっても良いであろう。例えば、レイディ・アカリが語るように、地球では、人工子宮が普及した理由を次のように説明されている。

…生きている母親の肉体を煩わすより、人工授精をした後の卵を人工子宮にいれてしまう方が、合理的だし楽だと判断したのだ。(それに、人工子宮を利用する女性は、妊

娠・出産による社会的なハンデを受けずにすむ。……それからまた……のち、人工子宮が白い目で見られるようになるもう一つの理由、すなわち、`胎児の管理がよりよくできること、も、人工子宮を選ぶ動機としては大きかった。)²²

この箇所では、「合理的」という言葉が用いられている。その合理性は家父長制的な社会のためにしかならず、「楽」さというものとカップリングしたものとして用いられ、女性の選択に影響を与える。妊娠は産むことも働くことも求める社会にとって「ハンディキャップ」として見なされている。要するに、女性の身体は国家のためにパフォーマンスするものとなり、テクノロジーの発展さえもそのためにしか行われていない。

以上、新井のフェミニズム論の根底にある「エコフェミニズム」と「自然主義フェミニズム」の特徴をみてきた。次は、こういったフェミニズム論は日本という文化的なコンテキストとどのように関連してくるか、そして本作にどのように表象されているかを考察していきたい。

5. 本作における「神道的」な考え方の影響

上記で考察した「エコフェミニズム」と「自然主義フェミニズム」は、丸山正次によると、日本の宗教「神道」と共通点がある²³。丸山の分析は、エコフェミニズムと神道を比較し、エコフェミニズムの矛盾を明確にする。丸山の展開を踏まえたうえで、『チグリスとユーフラテス』の根底にあるフェミニズムは、どのように捉えられるのであろうか。

まず、丸山の考察は「エコフェミニズムは階層二元性を否定する」という主張から始まる。神道は、人間と自然には同じ由来があると信じる。したがって、階層二元は存在しないのである。そうすると、自然と人間は血縁関係で繋がっており、同等である。

相互的な自己は、他者との関係を許しながら、同時に他者としての地球を志向性や位置を持つエージェント（行為体）として認識し、更に、他者は`正しい、行動に制限を設けるものとして理解する。〔中略〕上記で述べたように、神道では、人間と自然は血縁者としてみなされる。したがって、人間と人間でないものの対比は存在しない。²⁴

次のポイントは、このような「相互的な自己」(mutual self)に関わる。「相互的な自己」というのは、個人として存在しながら、他者や自然とのより深い結びを認識している自己である。そういった自己は、他者や自然の搾取を避け、それらを「ケア」するものとして扱う。つまり、その「相互的な自己」は、他者や自然との関係を優先し、他者に対する「愛情、ケア、保護」に基づいた関係を持つとするのである。

この点は、神道にも表現されていると丸山は指摘している。「相互的な自己」を、「日本的

な自己」²⁵と一致するものとして捉えれば、人間を「人の間にいるもの」として考えられる。更に、自然は「自己を持ち、生きているもの」として認識されており、人間と同じような存在として考えられている。²⁶「ケア」の概念に関しては、次のように述べられている。

「相互的な自己」との関係においては、他者はケアすべきものとして扱われる。(中略)
「ケア」と「相互的な自己」を引き離すことはできない。²⁷

ここで注目されている「ケア」は、自己と他者の区別からではなく、自己と他者の相互的な関係から始まる²⁸といえる。そう考えると、神道的な考えにおいても、関係性や感情を優先し、他者と向き合うことが重視されている。しかし、丸山の疑問は、神道における人間と自然の関係、そして男性と女性の関係にある。一方では、自然と人間の関係は、以下のよう
に捉えることができる。

ケアするというのは、手を加えないままにしたり、なすがままにしたりすることではない。それよりも、ケアするには、非常に注意を払うこと、そして常に手間をかけることが必要である。しかし、特定の自然だけをケアすることは、より広い生態系の不均衡をもたらすことがある。²⁹

他方では、男性と女性の間をみると、エコフェミニズムが求めている関係ははっきりとしていないものの、それが「階層二元性を否定する」ことだと丸山は推測する。

「(神道は)主として稲作農耕の宗教であるため、出産できる超自然的な力を持つものとして、女性を敬う」³⁰といえるが、同時に「生理と出産の穢れ」に非常に注意を払う。そのため、女性はたまたに疎外されているが、穢れが儀式などでなくなるものであるからこそ、一時的の疎外になるだけなのである。それでも、女性は「母親」として尊敬されていると同時に、その役目から切り離せない。

では、女性の役目は何であろうか。答えは簡単である。母親として見なされている。神道は生殖を敬うため、出産、育児、ケアに関する仕事は尊い仕事だと見なされる。女性の為すべきことは、こういった母親という役目に応じることである。日本人の女性は、この性役割的な役目は尊い義務だと教わった。これは、本質主義的なカルチュラル・フェミニズムに一番近い立場である。³¹

女性の本質は女性の社会的な役目により制限され、定義される。そういった固定化は、本作のモチーフとして、最初から最後まで暗示されている。例えば、レイディ・アカリ編にお

いては、「母性」は次のように描写されている。

妊娠した以上、たとえ幼くとも、成熟していなくとも、精神的にまだ子供であったとしても、そこに「愛」がなくとも。それでも、その女は、「母」である。そして、「母」とは、一種神聖な存在である。

それが当時の社会常識であり、必然的に、墮胎は厳に忌むべき事態であった。³²

また、マリア・D編において、その信仰、そしてその信仰に応じることのできないものの失望が描かれている。母になれなかった彼女が社会のプレッシャーに耐えられず、存在理由を見失ってしまう。

もしあたしが、今のゼウスの台詞を理解してしまったら…そしたら、あたしは。

その場合、あたしは一体、何なのだ？

この社会で、子供を産めることだけを楯に、有資格者としての特権を享受してきたあたし。

ううん、特権だの優遇だのは、もはや、どうでもいい。

その場合—子供を産む為だけにいる、このあたしの存在理由は、どこへ行ってしまうのだ？³³

マリア・Dの言葉から、女性に対する家父長制的な社会の期待を読み解くことができる。彼女の考え方は、「母」になり、子供の「ケア」をし、自分の人生の目的を達成する、ということにまとめられる。しかし、「無条件」に、「特定なもの」（この場合では、子供）を「ケア」することは、絶対的にいい状況に至るわけではなく、むしろ「社会制度」をそのまま保存し、継続させてしまう。そう考えると、神道的な考えは「家父長制社会」を継続させる因子になり得るものであろう。要するに、神道とエコフェミニズムの共通点を分析した丸山の結論は、次の通りになる。

自然—愛の文化 (culture of nature-love)は自然を愛するとは保証しない。愛は自然を無意識的に傷つけるだけではなく、生態的な合理性にも関わらず、意図的に自然を再構成させることに至る可能性がある。そして、脱構築的な二元論に基づいたとしても、〔訳注：性別を固定的・対比的なものとしては考えない〕男性・女性の関係は必ずしも男女平等に至るわけではない。³⁴

これから丸山の展開を『チグリスとユーフラテス』の考察に用い、本作における「神道的

な考え」の影響がどのように表れているかを明確にしていきたい。特に注目したいところは、ルナとレイディ・アカリの関係、そして「母親」という社会的役目である。

最後に、本作のエンディングをめぐり、神道的な「無常」感が表現されていることに着目したい。まず、ルナにとって、レイディ・アカリはどのような存在であろうか。最初の二人の出会いからみると、レイディ・アカリは「女神」として認識されている。しかし、抱きしめられた直後は、ルナに自分の母親「イブ・ママ」のことを思い出させる。その後は、彼女は「普通の人間」として認識されることがある。最終的に、レイディ・アカリはルナを「成長させなければならない」という覚悟を持ち、惑星ナインの「最初の母」にする存在になる。そこで、神道の観点からみれば、レイディ・アカリは「巫女」のような役目を果たし、「神道による女性の道（すなわち母性と子育てを行う役目）を唱える」³⁵。

更に考察すると、ルナの成長は、最終的に「母になる」ことに相当するといえる。ルナ自身の子供ではなく、自然（植物・動物を指して）の「ケア」をすることにより、神道的な自然と人間の結びつきに基づいた「ユニバーサル母性」は実現される。また、ルナは毎日、惑星ナインの生き物の「ケア」をすることに取り組み、人生に意味がないと思いながら、「ケア」という仕事をすることにより、満たされていく。そういったルナの変化は、小説内では例えば「もうちょっとルナちゃんに、この仕事をやらせて……」と願う場面において描かれている³⁶。ルナの態度に現れる変容により、神道的な考えにまた気づかされるのである。丸山の言葉を借りれば、次の通りに説明できる。

神道では、日常生活で努力することは直ちにこの陸地を生み出した神の意志に従うことであると同時に、その意志の履行だと信じられている。神はその陸地の人々に祝福を与え、人間の人生をいつまでも有意義的であるように望んでいる。（中略）個人の人生は、人類の生活を改良するタスクと分離できず結び付いている、ということに気づくことにより、満たされるのである。³⁷

ルナはひとりぼっちになってしまったが、「地球から船が来るかもしれない」という希望を抱き、ナインで生活し続ける生物のために一生懸命ナインの環境を整え、死ぬまで働き続ける。

本作の最後のシーンは、ルナが死を迎え、惑星ナインには人類がなくなった瞬間であるが、蛍が飛んでおり、死んだ彼女の声の「訝」が響き、一番星（アカリと名付けられたナインの太陽）がナインを照らし始める。

誰もいない宙港。

ゆるやかに、ゆるやかに、蛍達が飛んでいる。

「あ、チグリス」

「そして、ユーフラテス」

かすかに、聞こえてくるのは、過去の罅。

そして、一番星がのぼる一。³⁸

この場面は、非常に叙情的に描かれている他に、自然と人間の融合を示唆していると考えられる。人間の身体的な不在、蛍の飛んでいるイメージ、過去の罅、一番星という要素が立て続けに登場する。これらの要素は、丸山が指摘する神道の「生命の継続」を象徴しているといえる。丸山によると、「人間は永遠に生きることはできない。しかし、先祖と子孫と垂直的な関係性を持ち、多様な範囲でコミュニティーおよび生き物と横の関係性を持つことによって、生命は誕生と死とを通じ、継続するのである。」³⁹その論理に基づく、ルナはこれらの条件を満たし、惑星ナインの生命の継続を守ることができた、という結果になるであろう。

以上、エコフェミニズムと神道的な考えの共通点に触れながら、本作におけるそれらの影響をそれぞれ検討した。特に取り上げたのは、「母性」が女性の本質という考え、そして自然と人間の類似性である。最後に、生命の継続、という点に着目した。丸山が主張したように、エコフェミニズムと神道的な考えには類似点がある、ということを前提として、本作においてその類似性を表す側面を分析してみた。その結果、神道的な考えが応援する社会構造がエコフェミニズムにも存在する可能性があるため、その観点は本作にも表現されているといえる。更に、女性の疎外や自然の搾取を認める神道的な考えも、作中に表れているのである。この三つの点は、日本独特な文化要素として認識されているに伴い、『チグリスとユーフラテス』における新井の批判の根底にあると考えられる。

6. おわりに

『チグリスとユーフラテス』は1990年代の日本社会とその社会構造の表象として考えられる。本稿では、日本におけるフェミニズム論争、特に生殖に関する側面を中心に提起し、小説の世界に描かれる社会状況にどのように反映されているかを検討した。

その検討によって明らかになったのは、1980年代から1990年代にかけて、少子高齢化に対する関心が高まった結果として、中絶は制限すべきものと見なされてきた、ということである。同時に、女性に対する家父長制社会のプレッシャーや期待、そして経済的な不安は少子化のもう一つの原因だと思われる。しかし、少子化を防ぐものとして社会に求められてくるのが、「母親」という女性の〈本質的〉な役目である。しかし、その役目に応じることでできないものは、どうなるのであろうか。男性も同様だが、特に女性が経験するそのプレッシャーは、本作において、「不妊」あるいは「妊娠」を体験したことのない女性の視点から、

極端化しながら描かれている。

次に、新井の独特なフェミニズム論における「エコフェミニズム」と「自然主義フェミニズム」的な側面を考察した。それらの論理に属する自然と女性の本質的な繋がり、そして男性中心の技術開発というテーマに着目し、本作における生殖テクノロジーの使用を、家父長制的な技術として考えることができることを考察した。

また、エコフェミニズムに対する丸山の批判的な主張に踏まえ、彼の分析が展開したエコフェミニズムと神道的な考えの共通点は、本作にも存在するということを明確にした。特に、『チグリスとユーフラテス』の解釈を試みるために、丸山が指摘したエコフェミニズムの矛盾を考える必要がある。新井の社会批判の核心はまさにそこにあるといえる。本稿で行った分析は、神道的な考えによる「母性」の概念を中心に、生命の継続や社会現状の継続と結び付け、更に、その観点が物語ではどのように描かれているかを検討した。

さて、ルナの人生と死は、どのような意味を持つのであろうか。すでにカタストロフィが起きてしまっている世界においては、人生に意義がないと思いつけるルナは、惑星ナインの母になったとしても、それはどのように捉えればいいのかであろうか。一方では、神道的な考えの視点から見ると、生命の継続や、再生の希望が確かに本作で読み取れるのであるが、他方では、ルナはどうしようもないコンテキストにおいて惑星ナインの母になる必要があるかどうかを考えると、やはりレイディ・アカリの役目が非常に重要である。なぜなら、レイディ・アカリはルナを母にする行為を通じて、その社会の現状をもう一度見定めることに他ならないからである。それは、丸山が指摘する自然の「ケア」の問題点、すなわち「ケアは絶対的に理想的な結末に至る保証はない」ということである。

まとめてみると、ユートピアとして本作を読むならば、確かにユートピア的な側面はあるといえる。ユートピアの夢から始まった移住計画は結局失敗してしまうが、その欲求が残り、ルナにまで引き継がれるのである。特に、ラルス・シュマインクが指摘するように、ユートピアにおいては、実際に変化が起こる希望よりも、改善の欲求が重視されるのである。⁴⁰しかし、上記で述べたように、本作をクリティカル・ディストピア的なアポカリプス文学として評価したため、ディストピア観のほうが中心に描かれていると解釈できるのである。更に、ルナが象徴する惑星ナインの予測不能な運命は、クリティカル・ディストピアの形で、現代社会における不安や制度の破壊を示唆するのである。シュマインクの言葉を借りれば、

流動的な現代性において、我々は社会・政治・経済の現状の不確かさ・不安定・断片化・解体を体験し、それらの体験はクリティカル・ユートピアにおける可能な変化のあいまいなモデルに反映される。⁴¹

惑星ナインの終末期が来たとしても、また「再生」の可能性があると見える。しかし、本

作の結末を解釈してみると、「破壊」と共に、村上春樹が言う日本的な「あきらめ」が描写されていると感じられる。それが、神道的な考えに属する「無常」というものであろう。昔から自然災害が多い日本には、神道に由来する破壊と改築の文化⁴²が存在し、継続してきたのではないであろうか。村上春樹は次のように説明する。

日本語には「無常」という言葉があります。いつまでも続く状態＝常なる状態はひとつとしてない、ということです。この世に生まれたあらゆるものはやがて消滅し、すべてはとどまることなく変移し続ける。永遠の安定とか、依って頼るべき不変不滅のものなどどこにもない。これは仏教から来ている世界観ですが、この「無常」という考え方は、宗教とは少し違った脈絡で、日本人の精神性に強く焼き付けられ、民族的メンタリティーとして、古代からほとんど変わることなく引き継がれてきました。⁴³

要するに、『チグリスとユーフラテス』の結末を振り返ってみると、一方では、「改善への欲求」が残されていることも確かだが、その欲求はユートピアの根本的な要素に疑問を抱かざるを得ない。もしも惑星ナインに未来があるならば、そのユートピア的な未来は人間を含めるのであろうか。つまり、ユートピアというのは、人間を必要とするものなのであろうか、という疑問である。それに対して新井は答えを出さないが、自然との類似性・繋がりをより意識する未来が望ましいのではないかと、考えさせるのである。

他方では、新井の失敗した「実験」を評価するならば、一つ推測できることは、本作は現代日本社会におけるジェンダーステレオタイプの継承や認証に対する作家自身の〈遭難信号〉を表現しようとしているものとして考えることができる。新井は1980年代から、「少女」という家父長制的な概念の社会位置づけについて考察し続け、1990年代に発表された本作を通じ、女性の視点から戦後時代から何も変わらないような日本社会によるプレッシャーを本作に刻み、声に出したのである。新井も、希望を持ちながら、改善への欲求を表象したと考えられなくはない。

¹Mari Kotani/ Miki Nakamura 「Space, Body, and Aliens in Japanese Women's Science Fiction」 in 『Science Fiction Studies』 29巻3号, Japanese Science Fiction 2002年11月, 327～417頁

²新井素子, 大森望「対談 みごとな「嘘」がSFの醍醐味——『チグリスとユーフラテス』の完結をめぐる」『青春と読書』第34巻2号(通号267) 集英社, 1999年2月, 50～55頁

³Tomoko Tanaka 『Apocalypse in Contemporary Japanese Fiction』 Palgrave Macmillan, 2014年

⁴Booker, M K/Anne-Marie Thomas 『The Science Fiction Handbook』 Wiley-Blackwell Pub, 2009年

⁵Mari Kotani/ Miki Nakamura, 同書

⁶Tom Moylan 『Scraps of The Untainted Sky』 Avalon Publishing, 2000年

⁷ “A non-existent society described in considerable detail and normally located in time and space that the author intended a contemporaneous reader to view as worse than contemporary society but that normally includes at least one eutopian enclave or holds out hope that the dystopia can be overcome and replaced with a eutopia” https://openpublishing.psu.edu/utopia/content/definitions#_edn3 Retrieved on 2019/09/17

⁸Ayako Kano 『Japanese Feminist Debates』 University of Hawai'i Press, 2016年

⁹Ayako Kano, 同書

¹⁰新井素子 『チグリスとユーフラテス』 (上) 集英社2003年232頁

¹¹新井素子, 同書43頁

¹²新井素子 『チグリスとユーフラテス』 (下) 75頁

¹³新井素子, 同書85頁

¹⁴新井素子, 同書95頁

¹⁵新井素子, 同書 (下) 100頁

¹⁶新井素子, 同書 (下) 90頁

¹⁷Mari Kotani/Miki Nakamura, 同書

¹⁸新井素子 「チグリスとユーフラテス・新井素子さん「生」を問う最後の議論」『北國新聞』北國新聞社1999年

¹⁹Sherilyn MacGregor 「From Care to Citizenship: Calling Ecofeminism Back to Politics」『Ethics and the Environment』9巻1号, 2004年, 56-84頁

“Because it is women (as mothers) who do the caring, nurturing, and subsistence work that sustains human life, women care about (…) their environments which in turn leads them to take action to preserve and repair them. This relationship is to be celebrated, they argue, because caring for people and environments produces special insights about the interrelated processes of life that are different from the individualistic and exploitative (read: masculine) approach to these processes that has led to environmental degradation”.

²⁰Masatsugu Maruyama 「Deconstructive ecofeminism」『Worldviews』4巻,1号,2000年, 20-46頁

²¹原文Feminist naturalism

²²新井素子、同書 (下), 90頁

²³Masatsugu Maruyama,同書

²⁴Masatsugu Maruyama,同書

“The mutual self admits relationship with others and simultaneously recognizes the “earth other” as an agent having intentionality and its place, and moreover understands the other as setting limits on “right” action. (...) As pointed out before, in Shinto, human and nature are seen

as blood relatives. Therefore, an opposition between human and nonhuman does not exist”.

²⁵原文：Japanese self

²⁶Masatsugu Maruyama,同書

²⁷Masatsugu Maruyama,同書

“In the relationship of the mutual self, the other is treated as an object to be cared for. (...) “Care” and “mutual self” cannot be separated”.

²⁸Masatsugu Maruyama,同書

²⁹Masatsugu Maruyama,同書

“Caring does not mean nontouching or leaving alone. Rather, caring requires much attention and constant labor. But caring for particular natural objects may cause an imbalance in the wider ecosystem”.

³⁰Masatsugu Maruyama,同書

“Since (Shinto) is predominantly a religion of rice farming, it reveres women as having supernatural powers of birth”

³¹Masatsugu Maruyama,同書

“Then what is the role of woman? The answer is simple. She is viewed as a mother. Since Shinto conceives a reverence for the reproduction of life, the task relating to birth, nursing, and caring is viewed as a sacred task. What woman has to do is to comply with this mothering role. Japanese women were taught that this sexual role was a holy duty. This is the position closest to essentialist cultural ecofeminism”.

³²新井素子, 同書 (下), 86頁

³³新井素子, 同書 (上), 120頁

³⁴Masatsugu Maruyama,同書

“The culture of nature-love does not ensure the love of nature. Love may not only unintentionally hurt nature but may also intentionally remake nature regardless of ecological rationality. And the male-female relationship that follows the principle of deconstructive dualism might not necessarily lead to equality of men and women”.

³⁵Masatsugu Maruyama,同書

³⁶新井素子, 同書 (下) 373頁

³⁷Masatsugu Maruyama,同書

“In Shinto it is believed that diligent endeavor in daily life is at once the will of the Kami who brought this land into being and the fulfillment of their will. The kami bestowed their blessings on the people of this land and desire that men’s lives should never cease to be productive and fruitful. (...) Individual existence finds fulfillment only as one realizes that one’s own life is

inseparably bound up with the task of passing on and enhancing the life of the people one belongs to”.

³⁸新井素子, 同書 (下), 376頁

³⁹Masatsugu Maruyama,同書

“No human can survive forever. But as he or she has a vertical interrelationship with ancestors and descendants and a horizontal interrelationship with many degrees of community and natural beings, life itself continues through birth and death”.

⁴⁰Lars Schmeink 『Biopunk Dystopias : Genetic Engineering, Society and Science Fiction』
Liverpool University Press,2017年

“Utopia is defined by desire for improvement, not necessarily by the hope that change towards that desire is possible”.

⁴¹Lars Schmeink,同書

The uncertainty, insecurity, fragmentation, and dissolution of social, political, and economic realities that we experience in liquid modernity are thus reflected in critical utopia/ dystopia’s ambiguous models of potential change.

⁴²例えば「式年遷宮」を参照。Masatsugu Maruyama,同書において

“Because Kamis always live present lives during history and express their way through every event, we need only to accept ongoing reality and should not dare to see it from past golden times. (...) Accordingly, Shinto is a religion of the relative – in the positive sense that it is committed to reality in the endless process of becoming. It is for this reason that Shinto places such a high value on the birth of new life and on the transmission of life through successive generations”.

⁴³<https://www.kakiokosi.com/share/world/183> Retrieved on 2019/09/17

Alternative Utopia in Japanese Women's Science Fiction: An Analysis of Arai Motoko's *Tigris and Euphrates*

SAUTTO, Chiara

Abstract:

In this paper I analyze Japanese author Arai Motoko's *Tigris and Euphrates* (2003). The novel reconstructs the chronicle of an attempted colonization of the planet Nine. After some centuries of prosperity, however, the dream of creating a utopian society on a different planet ends miserably, due to the failure of artificial uterus technology and, consequently, to the declining birthrates. In this novel Arai deals with women's issues such as childbirth and the meaning of motherhood, highlighting the struggles of being caged in a specific societal role which women are expected to play along.

First, I classify the novel as an example of "critical dystopian apocalyptic literature", based on the fact that the main event described in the novel is the end of the world (Apocalypse) and, despite portraying a dystopian society in a dystopic setting, it still "includes the hope and desire that the dystopia can be overcome and replaced with a eutopia", which is a fundamental trait of critical dystopias.

Then, I compare the history of Japanese feminist debates related to reproduction (with an emphasis on abortion) with Nine's historical happenings. This analysis highlighted a striking similarity between Japan and Nine's chronology.

At this point I argue that at the basis of Arai's peculiar feminist theory it is possible to find some perspectives common to Ecofeminism and Feminist Naturalism. In particular, I have found that the analogy between women and nature, and the negative view of a "science made by men for men" are expressed in the novel as well.

However, since Ecofeminism has been criticized for its lack of clarity on how to overcome socially constructed gender, and the lack of explanation towards the possible action towards nature, I have applied the same perspective to the novel. I have referred to a critical approach that compares Shinto and Ecofeminism (Maruyama 2000), thus highlighting those elements derived from Shinto in Arai's work.

In conclusion, I suggest that the apparently ambiguous ending of *Tigris and Euphrates*, while questioning the real meaning of utopia, at the same time also demonstrates the alarming failure in overcoming gender stereotypes, which are deeply rooted in Japanese society and even partially justified by cultural beliefs, as Arai has made clear throughout her work.

Keywords: Arai Motoko, Apocalyptic Literature, Utopia, Dystopia, Childbirth, Ecofeminism, Gender